



日本の古代を 考える



小林 道憲

日本の古代を考える

小林道憲

目次

稲作の伝播と日本神話の変容

沖ノ島から文明を考える

古代の日本海からみた白山と立山

稲作の伝播と日本神話の変容

オホゲツヒメとウケモチ

よく知られた説話だが、『古事記』に語られているオホゲツヒメの死体化生説話には、稲作をはじめ穀物栽培の起源が象徴的に語られている。

高天原から追放されて下界へ降^{くだ}ってきたスサノヲは、まず食物をオホゲツヒメに求める。オホゲツヒメは、鼻や口や尻からいろいろの御馳走を出して、料理をして差し出す。このとき、スサノヲは、その仕事を覗いて、汚いことをして食べさせると思い、オホゲツヒメを殺してしまう。殺されたオホゲツヒメの屍体の頭から蚕が、目から稲種が、耳から粟が、鼻から小豆が、陰部から麦が、尻から大豆が生まれてきた。これをカムムスヒが取つて種としたという。

この死体化生説話は穀物と農業の起源を物語っているが、ここに出てくるオホゲツヒメは、人間に様々の生きる糧を与えてくれる大地の恵みを象徴している。だからこそ、スサノヲから求められれば、それに応じて、オホゲツヒメは次々と食物を無尽蔵に出してくるのである。この食物を無尽蔵に出してくるオホゲツヒメは、おそらく、縄文時代の母なる大地の女神だったのであろう。今日次第に明らかになってきているように、わが国の縄文時代の生活は相当に豊かな生活であったようで、人々は、海や潟湖や山や里の豊かな幸に恵まれていたようである。そのような豊かな幸を無尽蔵に恵み与えてくれる母なる大地への敬慕の念が、鼻や口や尻からいろいろの御馳走を出してくれる女神として崇敬されたのも、不思議ではない。

縄文時代は、狩猟採集経済によってのみ成り立っていたわけではなく、陸稲をはじめ、雑穀の栽培も手がけていたようである。さらに、縄文晩期には、大陸から伝播した組織的な水稲栽培も、北九州の先進地域を中心に始まっていた。そして、この水稲栽培をはじめとした穀物の栽培はかなり急速な勢いで本州全土に広がり、かくて、水稲を中心とした弥生時代が始まった。

この生活形態は、当然、神話にも反映された。オホゲツヒメの死体化生説話でも、スサノヲによってオホゲツヒメが殺され、その屍体から蚕や稲種や粟や小豆や麦や大豆が生まれてきたということになっているのも、この生活の変化を反映している。もっとも、稲作

を中心とする農耕生活は、陸稲も含めれば、縄文時代に、最初は、住居近くでの簡単な栽培から始まったであろう。それがやがて焼畑耕作から弥生の水田耕作に発展し、大規模化するに当たって、人々は、大地の改造や水の制御を必要とするようになった。オホゲツヒメがスサノヲによって殺されるという話は、もしかしたら、人間が農耕栽培を覚えるにしたがって、山野を開拓し、大地を傷つけていくことなしには、豊かな五穀の恵みを得ることができないということを象徴していたのかもしれない。

むろん、神話というものは重層的に出来上がっており、したがって、幾様にも解釈しうるものである。だから、これだけが、この死体化生説話の唯一の解釈ではない。この死体化生説話の最も古い源泉は、人間がまだ農耕栽培を獲得する前の純粹な狩猟採集時代にまで遡ることができる。人間に豊かな糧を与えてくれる山野の木や草は、冬になれば枯れ、萎え、大地のもとで、まるで死んでしまったかのように活動を停止する。大地も、また、あらゆる生命を生み出す力を失ったかのようなところがある。ところが、春になれば、大地は再び生命力を取り戻し、草や木は芽を吹き、活動を開始し、豊かな実実を人間に恵んでくれる。そのような大地の死と再生、また、そのもとでの植物の死と再生の観念が、大地女神の死と、そこからの五穀の再生という話の源泉であったであろう。

わが国の縄文時代の土偶に大きなお腹とお尻をした女神像があり、それらが多くの場合破壊されて、完成体に復元できるものが少ないのも、この時代の何らかの生産儀礼と関係があるようである。人々は、大地女神の犠牲がなければ、その年の豊かな収穫が保証されないと感じていたようである。この儀礼も、もちろん、オホゲツヒメの死体化生説話に反映している。

さらに、縄文時代から始まっているが、人々が極く簡単な植物栽培を覚えたときにも、この大地女神の死と再生の観念は、また新しい意味をもってきたであろう。例えば、芋の栽培でも、春先に芋をいくつにも切って、それを地中に埋めておかねば、豊かな収穫を得ることはできなかった。このような簡単な栽培農業での知恵が、また、大地女神が切り殺されてそこから豊かな恵みが生まれてくるという話と結びつけられてもいったであろう。

この縄文時代の伝承が弥生時代にまで持ち越されてくると、ここでまた神話の変容が起きる。オホゲツヒメという大地女神を殺すのはスサノヲという弥生を象徴する神となり、その屍体からも、稲種をはじめ五穀が生成してくるといって変容していく。さらに、この大地女神から生まれてきた五穀を、カムムスヒの女神が取って種としたという話まで加えられていく。こうして、この説話は、弥生時代特有の農耕神話に変貌する。カムムスヒ

は穀物の生成や死者の復活などで活躍する出雲系の女神であり、生成の原理を表わし、物を産出する霊力を象徴している。

オホゲツヒメの物語は、狩猟採集と雑穀栽培で生活していた縄文時代初期から、かなり大規模な農業が行なわれるようになった弥生時代後期までの長い歴史を重層的に反映している。もちろん、この長い歴史の中で様々な変容にもかかわらず、変わらないものはある。それは、オホゲツヒメに象徴される大地の生産力への信頼であり、恵み豊かな大地への敬慕の念である。オホゲツヒメの物語には、犠牲になりながらも無尽蔵に生産してくれる母なる大地への感謝の念が象徴的に語られているのかもしれない。『古事記』でも、オホゲツヒメは、地母神の性格を備えているイザナミから生まれたことになっている。この二柱の女神はいずれも大地女神であり、無尽蔵な生産神であるという共通した観念があったのである。

同じ穀物の起源を語った死体化生説話は、『日本書紀』の神代巻では、ウケモチ神の物語となっている。

地上に降り立ってきたツクヨミがウケモチのもとに着くと、ウケモチは首を巡らして、国の方に向かっては口から飯を出し、海に向かっては鱧はたの広もの・鱧はたの狭もの（大小の漁獲物）を口から出し、山に向かっては毛の龜かめもの・毛の柔なもの（粗毛・柔毛の獣）を口から出し、そのくさくさのものをすべて供えて、百箇もももの机に積み上げて御馳走した。このとき、ツクヨミは怒って顔を真っ赤にし、「何と汚らわしいことをするものか」と言って、剣を抜いてウケモチを打ち殺してしまった。そのウケモチの屍体の頭からは牛と馬が化かりいで、額からは粟あわが生まれ、眉の上には蚕まゆが生まれ、目の中には稗ひらが生まれ、腹の中には稲、陰部には麦あむぎと大小豆あまふゆが生まれたという。

ウケモチは食べ物を主宰する神であるが、海の幸や山の幸を無尽蔵に生み出しているところをみれば、やはり無限の生産力の源泉である大地の神であり、おそらく縄文時代にその源泉をもっているであろう。このウケモチ神がツクヨミに殺され、その屍体から五穀をはじめ様々のものが生まれたことになっているところに、農耕生活への移行が反映している。さらに、ツクヨミが剣でウケモチを殺すというところには、金属器文化の到来まで反映されており、それによって大規模な農業が可能になったことが象徴されている。朝鮮語による言葉遊びから創作されたためではあるが、ウケモチの物語では、穀物ばかりでなく、牛や馬なども生まれたとされているところをみれば、家畜の飼育の始まりまで語られており、最も発展した死体化生説話になっている。

穀物の起源を語るオホゲツヒメやウケモチの物語の原型は、『日本書紀』神代巻のワクムスヒの話である。イザナミが生んだ火の神カグツチと土の神ハニヤマヒメが結婚して生まれたとも言われるワクムスヒから、その頭の上に蚕と桑が生まれ、その隣そばの中に五穀が生まれたという。ワクムスヒは若い生産の霊力を意味した。火と土からワクムスヒが生まれ、そこから五穀が生じたとするのは、焼畑などによる農業の起源を説いたものであろう。古代人にとって、穀物を発見し、これを豊かな食糧にさせたことは、大きな驚嘆であり、大自然の偉大な恩恵であった。大地は無限の生産力の源泉であり、この大地の生産力への限りない信仰は、遠く縄文以来続いてきた記憶であった。

海幸・山幸

記紀神話に出てくるよく知られた海幸・山幸の説話にも、狩猟漁撈生活から農耕生活への変化の反映がみられる。

ウミサチビコは海の魚を捕り、ヤマサチビコは山の鳥獣を捕って暮らしていたが、ある日、ヤマサチビコはウミサチビコと互いに道具を取り替えた。ところが、ヤマサチビコはウミサチの釣針を失ってしまう。ヤマサチは長い剣を破って、たくさんの釣針をつくり償おうとしたが、ウミサチは承知しなかった。それで、ヤマサチは、シホツチの神の導きでワタツミの宮へ赴く。ワタツミの宮では、ワタツミから歓待を受けるとともに、ワタツミの娘トヨタマヒメと結婚して、三年にも及んだ。その後、ヤマサチは釣針のことを思い出し、事情をワタツミに話す。すると、ワタツミは海中の魚をことごとく集め、その中の鯛の喉から釣を見つけ、その釣とともに、兄を打ち負かすための知恵を授ける。釣を返す時には、「貧乏釣の悲しみ釣」と呪文を唱えて後ろ向きになって返す。また、兄が高い所に田を作ったなら、自分は低い所に田を作る。兄が低い所に田を作ったなら、自分は高い所に田を作る。そうすれば、三年の間に兄は貧しくなるであろうというものであった。もしそれを恨んで攻めてきたなら、潮満珠しほみたまを出して溺らせ、もし謝ってきたら、潮乾珠しほかわたまで生かし、苦しめよと言って、ワタツミは、二つの宝玉をヤマサチに授けて帰した。ヤマサチは、ウミサチに対して、ワタツミから言われた通りにしたところ、ウミサチは、平伏してヤマサチに服属したという。

このよく知られた海幸・山幸の説話は、南方の島嶼部を伝って九州南部にやってきたと思われる隼人族の伝えた説話である。したがって、これと同類の説話は、今日の東南アジアにもみられる。しかも、これはかなり古い説話類型だったので、ウミサチやヤマサチ

が海や山の恵みを捕って暮らしていたという話からも分かるように、農耕以前の狩猟漁撈生活を反映している。おそらく、この説話を携えて南方からやってきた単人族をはじめとする海洋部族は、弥生人が北方の朝鮮半島からやってくる以前の縄文人だったのである。

だが、この縄文人も、縄文晩期から弥生にかけて、水稲稲作を覚え、次第に農耕生活に入ってしまったと思われる。海幸・山幸の話でも、最後の所で、二人とも共に田を作っており、しかも、水の制御力によって優劣が決まっているのは、そのことを反映している。単人族が南方から伝えてきた元の海幸・山幸の物語は、ワタツミの宮訪問とトヨタマビメとの結婚を中心として構成されていたのであろう。兄弟の田作りの話は、後に付け加わったものと思われる。

しかし、このような形で神話は絶えず変容し、変容することによって、長い歴史と生活形態の変化を表現する。ヤマサチビコがホヲリノミコトまたはホホデミノミコトと言われ、ウミサチビコがホデリノミコトと言われ、いずれもホノニギノミコトの子とされて、どれも稲穂と関係のある天つ神の子孫とみられているのは、稲を崇拜する高天原系部族の神話体系の中に、単人族の伝承が組み込まれ、体系づけられたためであろう。神話の構造は重層的に出来ている。一つの神話は、縄文から弥生さらに古墳にまで至る歴史が折り重なって形作られ、長い歴史を反映するのである。

ヤマタノヲロチとササノヲ

ササノヲのヤマタノヲロチ退治の説話にも、この歴史の重層性は反映している。

ササノヲが出雲の国の肥の川の川上、鳥髪というところに天降りして、その川から箸が流れてきたので、その川上に人が住んでいると思って、そこを登っていくと、この国の国つ神オホヤマツミの子でアシナツチとテナツチという名の老翁と老女が、クシナダヒメという名の少女を中において泣いている。そして、娘はもと八人いたが、これを高志のヤマタノヲロチが毎年来て食べてしまい、今またその来る時期になったので泣いているのだと訴える。そのヤマタノヲロチは、目は丹波ほおすきのように真っ赤で、体一つに頭が八つ、尾が八つ、体には苦、檜、杉の類が生え、その長さは、谷八つ峰八つを渡る。その腹は、いつも血が垂れて爛れているという。いかにも恐ろしい大蛇であった。そこで、ササノヲは、クシナダヒメを得て、姫を櫛の形に変えて髪に刺し、この大蛇退治に取り掛かる。アシナツチとテナツチに、八つの入口と八つの濃い酒の入った桶を用意させる。やってきたヤマタノヲロチが、それを、それぞれ首を乗り入れて飲み干し、酔って寝たところを、

スサノヲは十拳の剣を抜いて切り散らしたので、肥の川が血になって流れたという。その大蛇の尾の先から鋭い太刀が現われ、それがアマテラスに献上されて草薙の剣となる。

このよく知られたヤマタノヲロチ退治の伝説に出てくる大蛇は、もとは水の神であり、縄文時代の生命力信仰に根差している。生命力に富み、何度も脱皮を繰り返して、冬眠から幾度も目を覚まして春を呼び、その頭が男根に似た蛇は、土器にも表現されているように、縄文時代以来、豊穣を約束してくれる神霊として崇拝されていた。このような蛇信仰は、われわれの命を養い植物を育てられる水や、この水をもたらしてくれる雷と結び付けられて、新石器時代には、世界のどこでもみられた。

しかも、この蛇信仰は、水稲稲作が始まってもおお統していた。わが国でも、われらの祖先は、水の神を蛇に見立て、それに供物を捧げ、それに矢を射ったり、切ったり、焼いたりして、五穀の豊穣を祈っていた。クシナダヒメやその姉妹は、もとは、年毎にこの蛇神を迎えて饗応する神女であり、神の一夜妻として、聖なる交婚を営む儀礼を行なっていたのである。クシナダヒメという名も、奇しくも豊かに稔る稲田の姫という意味であり、これは稲作儀礼と深くかかわっている。スサノヲが酒をヲロチに与えるのも、ヲロチが畏き水の神であるがゆえであり、酒はその御饗であつた。

ところが、水稲稲作を中心とした農業技術が広く普及してきてきたが、野や山の開墾、川や水の制御が必要になってきた。すると、この川や水の制御技術の発達で、神話の変形をもたらす。もとは水の神であつた大蛇ヤマタノヲロチは、人を捕って喰う恐ろしい怪物に変貌し、神を供応する神女は、怪物への犠牲とみられるようになったのである。水は作物を育ててくれる力となると同時に、しばしば氾濫を起し田を破壊しましたから、ヤマタノヲロチが人を悩ます邪霊に変ずるのは、それほど困難なことではなかつたのである。

また、水田を開墾し治山治水を行なうには、偉大な指導者が必要であつたために、そのイメージは、スサノヲという英雄に託されて語られるようになる。さらに、また、農業開発のためには、鉄器を中心としたかなり大がかりな技術が必要としたために、そのイメージは、スサノヲが振るう十拳の剣のイメージとなつて、神話の中に現われてくる。大地神である蛇が剣を振るう天父神に退治されるという説話は、農業が進展しかなり大規模な治水工事が行なわれるようになった時代であれば、世界のどこにでもみられる神話である。

わが国では、これが、スサノヲのヤマタノヲロチ退治となつて表わされたのである。この説話は、縄文時代に源泉をもち、縄文晩期から弥生にかけて水稲稲作農業が進展していく

過程で次第に変容されていった物語だったのである。

高天原神話

高天原神話に至れば、ほとんどが、水稲稲作を中心とする農耕神話によって貫かれている。

現に、記紀神話によれば、アマテラス大神自身高天原で田を作り、さらに、うやうやしく新嘗の祭りを取り行なっていたという。水稲稲作技術を携えて次々と渡来した弥生系の諸族は、稲をはじめとする穀物に永遠の生命力みて、これを神として尊んだ。この稲の霊の永続と、稲を育てる大きな力となる太陽の生命力の永遠を願う祭りが、新嘗の祭であった。新穀を神に供え、それを神と共に食し、五穀豊穡を祈る新嘗の祭りは、昔から神聖な行事の一つであった。

この新嘗の祭りを取り行なつたのは、もとは、アマテラスに象徴されるように、主に女性であった。新嘗の祭りでは、村を挙げて厳重に潔斎をし、婦女子は屋内に籠って神との交流を待った。女性こそ生命を司り、穀物に生命力を付与する力を持っていると思われていたからである。高天原でも、女神アマテラスは田を作り、神衣を織り、新嘗の祭の用意をして、神との交流を待っていた。

新嘗の祭りは、もと冬至の祭りであった。冬至の日、太陽の霊力は一年中で最も弱くなる。その最も弱くなった太陽の霊力の復活を祈る儀式が冬至の祭りであり、新嘗の祭りであった。太陽の力が最も弱まる日は、同時に、そこから再び太陽の力が復活してくる日でもある。しかも、この太陽の霊力は、その太陽の霊力によって育まれる穀霊とも深くつながり、冬至の夜は、穀物がその霊力を回復する時でもある。それは、一年の終わりであると同時に、一年の始まりでもある。この時、宇宙は一旦天地創成の始源に回帰し、そして再生する。新嘗の祭りは、神々に供えた神饌を神々とともに食す祭りであるが、しかし、それは、神饌を食すということによって、神饌によって象徴される穀霊と、それを育む太陽の霊力を自分達の体内に宿し、その再生を祈る儀式であった。

アマテラスの天の岩戸隠れとそこからの復活についてのよく知られた神話も、この年ごとに行なわれる新嘗祭の儀礼の反映である。それは、衰弱した太陽の力の更新を祈る儀式であり、太陽の再生を願う神聖な儀式だったのである。したがって、これを汚すことは重大な罪であった。スサノヲが高天原で乱暴狼藉を働いたとき、その乱暴狼藉の一つに、アマテラスが新嘗きこしめす時を見て、ひそかに新嘗の宮に糞をするという行為がある。こ

れは重大な罪に値するものとみられた。実際、スサノヲは、高天原で畔離、溝埋、屎戸、生剥、逆剥など乱暴の限りを尽す。これは、農耕社会の秩序の破壊ばかりでなく、宇宙の秩序の破壊さえ意味した。そのような破壊によってもたらされる災厄を、人々は罪と考えたのである。現に、その秩序の破壊の報いは、アマテラスの岩戸隠れによって、太陽が急に隠れてしまい、天上天下ことごとく真つ暗闇になり、あらゆる災いが招かれるという形で起きた。

仲哀天皇が神の言葉を信じなかったために、神の指図通り死んでしまったときも、人々は驚懼して、国内から幣帛をとって、生剥、逆剥、畔離、溝埋、屎戸、不倫の結婚の罪の類を求めて、国の大赦えをして、これを清めている。いずれも、これらは、水稲稲作に伴う共同体の秩序の破壊に係わる罪が中心になっている。スサノヲに贖いものを出させて高天原から追放し、仲哀天皇の死に際しても、国内から幣帛をとって国の大赦えをしているのは、共同体の秩序と宇宙の秩序の回復のためであった。どれも、水稲稲作がかなり普及して、共同体組織が強固になってからできた神話伝承であった。

降臨する神

水稲稲作技術を携えて渡来してきた弥生系諸部族は、稲を稔らせ豊かな恵みを与えてくれる大自然の生命力の起源を、太陽の輝く天上世界、高天原にみ、しかも、豊穰を約束してくれる神が天上から降臨してくるという観念を抱いていた。天上には日や月や雷の神がおり、王権を保証したり、穀物の豊穰を約束してくれると信じ、そして、これらの神やその子孫が、天上から山や大木に降臨して来ると信じていたのである。

神が天上から降臨してくるとい形式は、記紀神話に繰り返し登場してくる形式である。よく知られた天孫降臨の神話は、その代表である。ようやく平定された葦原の中つ国の統治を任せるのに、太陽神タカミムスヒが、天孫ニギノミコトを、嬰兒を包む襦、真床追衾で覆いかぶせて地上に降らせる。ニギノミコトは、天盤倉を離れ、天八重雲を押し分けて、その威厳によって道を押し分け押し分け、切り開いて、やがて筑紫の日向の高千穂の峯に降臨したという。

もともと、この赤子のニギノミコトが筑紫の日向の高千穂の峯に降臨したという話は、何ら歴史的事実を反映したものではない。天孫降臨の話は、初めはもって単純な話であった。秋に取り入れた稲を積んでおくところをニホと言ひ、そのニホを依り代として穀霊神が降臨するという最も古い信仰があった。高千穂とは、もとは高く積み上げた稲積み（二

ホ)の意味であり、そこから、高千穂という山の峯にホノニギが降臨したという話に発展していったのであろう。日向も、古代日本人が殊に関心を示した朝日夕日の照り輝く場所、つまり日の当たる所を意味し、特定の地名を表わすものではなかった。しかし、日向の連想から、後、筑紫の日向という話に発展していった。そこへ、真床追奈の信仰が合流し、タカミムスヒの司令で、生まれたてのホノニギが真床追奈に包まれて高千穂の峯に降臨するという話が出来たのである。

稲穂は、わが国では、古来、神として尊ばれていた。イザナキ・イザナミの国生みの後も、幾柱かの神々が生まれたことになっているが、その中にウカノミタマがいる。これは、食糧の生命力の神であり、納屋に納める稲の霊を表象したものである。アマテラス直系の三代の神も、オシホミミノミコト、ホノニギノミコト、ホホデミノミコトということになっている。どれも稲の穂を讀えた名をもつ神々である。このうち、高天原から降臨したホノニギが天孫と考えられているところをみれば、そこに高天原系部族の稲に対する信仰を読み取ることができる。天孫降臨神話も、新嘗の斎場の稲穂に若々しい穀霊が降りる姿から想像されたのかもしれない。実際、天孫降臨神話には神降しの宗教的儀礼が反映している。

東征を行なったといわれる神武天皇の源泉も、イナヒノミコトとミケイリノミコトの二つの霊だと考えられている。これらも稲魂や御食野の魂を意味する神である。偉大な太陽の力に育てられる稲が、霊力をもつた神であり、人間に生きる糧を与え、生命力を養ってくれるものと信じられたのも、稲作民族にとって必然であった。ニギノミコトも、正式の名前はアマツヒコヒコホノニギノミコトであり、稲穂の賑々しく稔った有様を意味した神名である。ニギノミコトは、もとは、幼童の姿で天から降臨する穀霊神であった。

だが、天孫降臨の話はさらに発展体系化されて、アマテラスからの神勅や三種の神器の授受、諸氏の祖先つまり五部神の天降りの話まで加上されていく。この五部神は、祭祀に関するそれぞれの職業を分掌し、天孫を助ける側近という位置を占めている。さらに、軍事を司る二部神まで加えられて、大きな天孫降臨の体系が出来たのである。この五部神の中には中臣氏や忌部氏の祖先神、アメノコヤネノミコトやフトダマノミコトが、二部神の中には大伴氏や久米氏の祖先神、アメノオシヒノミコトやアマツクメノミコトが含まれている。また、このニギノミコトの天降りの道を照らし先導した国つ神として、サルタビコの神も登場してくる。

これは、おそらく、古代日本の激動期に他の氏族を服属させていった大和政権の発展過程を反映しているであろう。それにしたがって、神話も発展体系化され、日本の神話は朝廷の神話を中心に統一されていった。高天原系部族によって国家統一がなつて以後、彼らは、その統治のいわれを天孫降臨の神話に託して理解したのである。

天孫降臨神話は、穀霊降臨神話から形成されて、それがやがて、始祖降臨神話に変わっていったものである。事実、これも後の付加ではあるが、ニギハヤヒは、降臨の際、アマテラスから稲穂（倉庭の穂）を授受されるとともに、鏡をも授受されたとも言われる。稲穂は穀霊の象徴であり、鏡は太陽の象徴である。この鏡、八咫鏡は、アマテラスからニギギヨミコトに、「我が御魂として、吾が前を拝ぐがごと、奇きまつれ」と言われ授けられたものだともいう。この鏡と、同時に授けられた剣と勾玉が三種の神器であり、皇位の象徴になる。穀霊神話が始祖神話に変化したのである。

太陽と穀霊崇拜を中心とする天孫降臨神話は、神の垂直降臨神話であり、北方から伝わった大陸系の神話類型だと言われ、高天原系部族の北方起源を暗示している。この垂直降臨神話は、始祖が単独で天から降りてくるという神話が原型になつて、各地で様々の天降り神話を作っている。

記紀神話は、稲作を中心とし天上からの神の降臨を信じた高天原系部族の神話によって統一されている。この神話体系の中に、それ以前から他の部族によって伝承されていた縄文時代以来の神話や弥生系譜の別の神話が体系的に組み込まれていったのである。それは、縄文時代から、水稲稲作が伝播した縄文晩期を経て、弥生から古墳にまで至るわが国の長い歴史を反映している。しかも、その長い歴史は、稲作を中心とする農耕技術の発展によつて形作られ、統一国家の形成にまで至っている。この長い歴史が神話にも反映し、神話の構造や体系の変容を引き起こしていったのである。

参考文献

- 倉野憲司・武田祐吉校注『古事記・祝詞』（日本古典文学体系1）岩波書店 一九八三年
武田祐吉校注『新訂古事記』（角川文庫）角川書店 一九八三年
青木和夫他校注『古事記』（日本思想体系1）岩波書店 一九八五年
坂本太郎他校注『日本書紀』（日本古典文学体系 67・68）岩波書店 一九八六年
森浩一編『縄文・弥生の生活』（日本の古代4）中央公論社 一九八六年
西郷信綱『古事記の世界』岩波書店 一九九一年

松村武雄『日本神話の研究』一く四培風館 一九五五年く一九五八年

吉田敦彦『豊穡と不死の神話』青土社 一九九〇年

吉田敦彦『日本神話の特色』青土社 一九九〇年

吉田敦彦『縄文の神話』青土社 一九九〇年

『文明の危機』講座「文明と環境」第5巻 朝倉書店 一九九六年所収

沖ノ島から文明を考える

二つのルート

『日本書紀』仲哀天皇二年の条に、次のような話がある。仲哀天皇は、氣長足姫（神功皇后）を皇后に立て、角鹿（敦賀）に行幸し、行宮として簡飯宮を建て、さらに紀伊国に御幸したが、このとき、熊襲が謀叛したので、熊襲征討のために、船で穴門（下関市豊浦町周辺）に向かった。一方、神功皇后は、角鹿を立ち、浮田門（穴門）を通って、穴門に至って、天皇と合流したと言われる。もちろん、この仲哀天皇と神功皇后にまつわる伝承は史実だとは言えない。しかし、五世紀ごろには、仲哀天皇がとつたと思われる瀬戸内海ルートのおかげに、神功皇后がとつたと思われる日本海ルートが開けていたのである。

神功皇后は息長氏から出ている。息長氏は、琵琶湖東岸の坂田郡を本拠とし、琵琶湖から、敦賀、丹波（丹後）、但馬、筑紫などに海上権益をもった豪族であった。大和政権にとつて、この日本海ルートを確認することは、大陸に至るシーレーンを確認するためにも、また、西国牽制のためにも必須のことであった。このルートを確認していた息長氏は、それを背景に、大和政権と深くかかわっていたのである。

これらの伝承や史実にもあるように、五世紀頃には、大和から玄界灘へ至る海上交通路として、二つのルートがあった。大和から難波に出て、瀬戸内海を通り、関門海峡を抜けて、玄界灘に出るコースは、以前からよく知られている。しかし、同時に、大和から淀川水系と琵琶湖を通って、敦賀に至り、若狭、丹後、但馬、出雲を通って、玄界灘に至るもう一つの航路が古代にはあったのである。

わが国の古代文明は、中国大陸や朝鮮半島からもたらされた新しい文物によって形成されてきた。このとき、日本海沿岸部は、大陸から新しい物や技術、人を受け入れる役割を果たし、各地域の発展に寄与した。大和政権にとつても、日本海沿岸部から、琵琶湖、淀川水系を通って、畿内に至る（日本海ルート）は、その発展を支える生命線であった。

三世紀から六世紀にかけて、日本海沿岸部で、大和政権と比較的早くつながりをもつたと思われる地域は、敦賀から若狭、丹波、丹後、但馬に至る本州の日本海沿岸部と、北

九州の玄界灘沿岸部の二つであったと思われる。これら二地域は、どれも日本海に面し、鉄素材をはじめ、大陸から常に新しい文物が流入してきていた地域であった。そして、この二つの地域が、大和政権と比較的早いうちにつながりをもったということは、大和政権が半島や大陸と交渉をもつために、その海上交通路の要衝として、この二地域をまず確保したということの意味する。特に、大和政権にとって、鉄素材の入手は死活問題であったから、この二地域は、大和政権にとって最重要地域だったのである。四方海に囲まれた日本列島にとって、シーレーンを確保することは、王権の成立にとって必須のことであった。おそらく、大和政権が最も早くに開いたルートは、大和から瀬戸内海を通って玄界灘に出、朝鮮半島に至る（瀬戸内海ルート）であつただろう。そのために、大和政権は、瀬戸内海諸国や北九州諸国との間に、経済的・政治的の同盟を成立させていたと思われる。しかし、それよりも遅れてではあるが、大和から淀川水系を通って琵琶湖に至り、敦賀や若狭に至るルート、さらに陸路で丹後に出るルートなど、朝鮮半島につながる（日本海ルート）も、大和政権にとって重要な海上交通路であつた。このことは、神功皇后や応神天皇にまつわる神話や伝説が、筑紫と敦賀の二地域に多いことなどからも推し量ることができる。したがって、かなり早いうちから大和政権と密接な連絡を取り、そのことによつて自分の支配権を維持していた地域は、越前南部や若狭、丹波や但馬、および筑前の玄界灘周辺部であつたと思われる。そのうち、北部九州の北東部の諸国は、先進地域だつたといふこともあつて、四世紀の古墳前期には、大和勢力と密接なつながりを持ち、すでに同盟関係にあつたと思われる。大和勢力は、早いうちから、瀬戸内海を通って玄界灘に出、朝鮮半島南部に至る海上交易路を確保していたからである。しかし、同時に、また、この玄界灘は、（日本海ルート）との合流地点でもあつたのである。

宗像氏の役割

そこで活躍したのは、玄界灘沿岸部を本拠地としていた宗像氏や阿曇氏や住吉氏など、海人族であつた。このうち、宗像氏は、どちらかというところ、大陸や半島との交易に従事していた外洋航海型の海人族だつたと言われる。大和政権も、瀬戸内海から玄界灘に出て大陸や半島に至る海上交通路を確保する必要があつたから、宗像氏を早くから勢力圏に置いていた。宗像氏は、筑紫から朝鮮半島諸国や中国大陸に出航する船や乗組員を管理統率す

る豪族だったのである。

宗像氏は、早くから大和政権と深く関与しながら、大和政権に必要な物資、技術、情報を、その交易力によって半島から調達していたと思われる。四・五世紀の盛大な沖ノ島祭祀も、宗像氏が大和政権のいわばエージェントとして執り行ったものと思われる。実際、玄界灘を東西に分断する神湊と大島との間の海峡は、宗像海人族の管理のもと、玄界灘を制圧することができたから、大和政権にとっても、宗像氏を勢力圏に置くことは不可欠なことだったのである。

海の航行に活躍していた海人たちは、常に航海の安全を祈願して出帆した。これら海人族の齋^いき^りる神々のうち、宗像氏の崇敬した神々はよく知られている。玄界灘に浮かぶ孤島、沖ノ島の沖津宮にはタゴリヒメノカミが祀られ、宗像市大島の中津宮にはタギツヒメノカミが祀られ、宗像市田島の辺津宮にはイチキシマヒメノカミが祀られ、三神を総称して宗像三女神と言ひ、三社を総称して宗像大社と呼んでいる。

なかでも、沖ノ島の沖津宮は、大和政権と朝鮮半島との交流上、盛大な尊崇を集めた。沖ノ島は玄界灘に浮かぶ周囲四キロメートルの全島岩山の小島にすぎないが、この沖ノ島に四世紀から九世紀にかけてのおびただしい数の祭祀遺物が出土するのは、沖ノ島が朝鮮半島への航海の安全を祈願する国家的な祭祀の場であったことを物語っている。この小島が『古事記』『日本書紀』にも記載されているのは、そのことによる。宗像大社から宮地獄神社一帯の山麓地帯には、七、八十メートル規模の前方後円墳が多数存在しているが、これらは、沖ノ島の祭祀を司っていた宗像族の墓だったのであろう。

宗像三女神は、アマテラスとスサノヲの高天原での誓約^{ちかひ}の時に、アマテラスがスサノヲの剣を三段に折って生んだ女神ということになっている。これは、遠洋航海に従事していた海人族・宗像氏が、かなり早いうちに大和政権の勢力圏に入り、航海や軍事に奉仕するようになったことによる神話的調整であった。現に、宗像三女神は、『日本書紀』でも、天孫を助ける役割をもたされている。

海人集団を支配下に置き海上交通路を抑えることは、王権の維持と発展にとって最重要なことであった。海上交通路は、生活必需品にしても、威信財にしても、他地域からの重要物資の流入経路であり、この経路を握ることは、権力を握ることにつながった。特に、海上交易を通して輸入されてくる物資の集積と分配が行なわれる港、また、特産品を輸出

品として積み出す港、つまり交易港を管理することは、それ自身、王権そのものを発生させるものであった。

朝鮮半島への道

宗像三女神の鎮座する田島、大島、沖ノ島の線を、北に延長すれば、金海伽耶に達する。伽耶ばかりでなく、新羅や百済の朝鮮半島南部は、列島と半島の重要な拠点であった。この対馬海峡を横断する海上ルートは、東シナ海交流圏と日本海交流圏の接点に位置し、半島と列島の交易圏の交わる重要な海の回廊であり、いわば、文明の十字路であった。この回廊を通して、朝鮮半島から日本列島へ、鉄素材、騎馬技術、金銅製品、金製品、須恵器など、新しい文物が続々ともたらされ、人も渡来し、列島の古代文明を一変させていったのである。

弥生時代でも、奴国をはじめ北部九州に乱立していた諸都市国家は、それぞれ航海にすぐれた能力をもつ海人集団を抱え、盛んに朝鮮半島と交易を行ない、繁栄していた。この時代、北部九州の諸国は、朝貢という形をとって楽浪郡と盛んに交易していた。北部九州から朝鮮半島西岸を通って楽浪郡に至る海上交易ルートが確立していたのである。

一支国^{いさ}や対馬国も、交易によって成り立った港市国家であった。『魏志倭人伝』でも、一支国や対馬国の人々は、船に乗って南北に市^し（交易）していたと言われている。一支国や対馬国は、南は北部九州、北は朝鮮半島南部や楽浪郡を結ぶ中継貿易の管理によって栄えていたのである。老岐や対馬など、玄界灘の島々は、大和地方、瀬戸内海、日本海沿岸、北部九州、朝鮮半島、中国大陸を結ぶ重要な中継地であり、拠点であり、表玄関だったのである。沖ノ島は、これら玄界灘の島々を拠点に活躍した海人族たちの共同祭祀場であった可能性もある。

弥生時代以来、一支国や対馬国を介して、青銅器、鉄器、高級絹織物、綿などが輸入され、その見返りとしては、玉類、麻織物、木材、海産物、食糧、労働力などが輸出され、旺盛な交易が行なわれていたのである。一支国や対馬国は、人の通行、物資の流通、情報の伝達にとって重要な拠点であった。その交流には、宗像族をはじめ北部九州の海人たちが活躍した。日本文明は、海外から新しい文物が流入することによって、常に新しく形成されてきたが、老岐や対馬は、その海外からの新しい文物をまず最初に受け取った先進

地域であった。中国という中心文明から発した文明の波が、朝鮮半島を通過して対馬や老岐に至り、それが北部九州から畿内にもたらされ、周辺文明としての日本文明が形成された。

四世紀から五世紀にかけても、老岐や対馬を通り朝鮮半島に赴いた倭人は、朝鮮半島の新しい文明世界に出合い、驚嘆したことであろう。乗馬の風習や、甲冑に身を固めた戦士、金銅製冠帽、須恵器、文字による記録など、文明社会のすべてが、倭人にとっては驚きであった。この新しい文明を、倭人は積極的に受け入れたのである。なかでも、朝鮮半島南部との交易によって獲得した鉄素材は、鍛造されて、農器具や漁撈具、土木工具や馬具などに加工され、列島の古代文明の飛躍的發展を可能にした。

しかし、交易は物の交換であるから、持ち込まれたものがあれば、必ず持ち出したものがある。列島から半島へもたらされたものの代表的なものは、翡翠や碧玉などの玉類であったと思われる。新羅の古墳から出土する王冠に飾られた翡翠の勾玉は、四世紀後半以後のものと言われる。この朝鮮半島出土の翡翠の勾玉は、交易を通して、日本列島からもたらされたものである。玉類の生産は、日本海沿岸部の特産品であるが、五世紀頃の古墳時代には、玉作りは大和や筑紫にも及び、大規模な生産がなされていた。

韓国南部の百濟時代の遺跡、全羅北道扶安の辺山半島の突端にある竹幕洞遺跡から、沖ノ島祭祀と酷似した祭祀遺物が数多く出土しているのは、おそらく、宗像海人族をはじめ、列島の海上交易従事者の居留地があったことによるであろう。この遺跡からは土製や滑石製の祭祀遺物が出土しており、それらは、沖ノ島の祭祀遺跡から出土するものと同類である。おそらく、百濟国内の素材を用いて、倭人が作った祭具であろう。特に、滑石製模造品の中の短甲形は、宗像大社の高宮祭場から出土しているものと全く同じである。ここでも、宗像海人族は、沖ノ島と同じような祭祀を行ない、航海の安全を祈りながら、さらに、高句麗や中国北朝へと向かったと思われる。竹幕洞遺跡は、大和から、玄界灘、朝鮮半島南部、朝鮮半島西海岸を通過して、大陸に向かう中継地だったのである。

草原の道へ

かくて、この海上交易ルートは、ユーラシアの草原の道やオアシス路（シルクロード）など、陸の交易ルートとつながる。海の道は陸の道に通じる。

なかでも、草原の道を通して遊牧民がユーラシア大陸の西から東へ運んだものは、青銅

器や鉄器や馬などであった。例えば、紀元前一〇〇〇年頃から活躍した騎馬遊牧民のスキタイは、南ロシアの草原地帯にあって、早くから動物意匠を特徴とする独特の青銅器文化をつくりだしたが、このスキタイの青銅器文化は、草原の道を通って匈奴に担われ、南モンゴリアに波及、中国の綏遠盆地を中心に起きたオルドス青銅器文化となった。このオルドス青銅器文化は、中国大陸の戦国時代から漢代の文化の影響を受けて、胡漢様式の青銅器文化を生み出した。中国大陸北東部に起きた遼寧式青銅器文化も、胡漢様式の青銅器文化であった。これらが、朝鮮半島に流入し、列島の海人たちの仲介を経て北部九州にもたらされ、紀元前六世紀以後の日本文明の弥生文化形成に大きな影響を与えたのである。日本列島では、青銅器は鉄器と同時に流入してきたために主に祭器に用いられたが、その源泉は、遼寧式青銅器文化やオルドス青銅器文化にあり、さらに、それは、南シベリアや南ロシアのスキタイ文化に起源をもつことになる。

青銅器とほとんど同時期に列島に流入してきた鉄器も、日本文明に大きな変動をもたらしたが、これも、青銅器同様、草原の道の匈奴やスキタイに源泉をもっている。交易などを通して、草原の道由来の鉄器や鉄素材、鍛鉄技術や精錬技術が、戦国時代後期の華北の燕や朝鮮半島を通して入ってきたことは、農業生産の増大や社会の激変をもたらした。この鉄器の普及は、列島各地に小地城国家を成立させ、都市文明の原型をつくっていった。このような日本文明の激動をもたらしたのも、その源泉は、匈奴やスキタイが普及した製鉄技術にあり、それを運んだのも、主に對馬海峡を往来していた海人族であった。日本列島への鉄器文化の流入も、遠くユーラシア大陸の西部に源泉をもち、長い時間をかけた伝播の歴史を背景にしているのである。

さらに、中国大陸に大帝國を築き上げた漢は、紀元前一〇七年に朝鮮半島に楽浪郡をはじめ四郡を置いたが、朝鮮半島諸国はこの楽浪文化の影響も直接受けたから、紀元前後の日本列島は、朝鮮半島との交流によって、この文化の影響も受けた。紀元前後の日本列島は多くの都市国家に分かれていたが、それぞれの都市国家が朝鮮半島の楽浪郡などに朝貢することによって流入してきた青銅器や鉄器は、列島の文明を大きく変革した。ユーラシア大陸の騎馬遊牧民に源泉をもつ文明が日本列島に流入することによって、弥生時代の日本文明は大きく変動していったのである。

スキタイや匈奴がもたらした青銅器文化や鉄器文化は、海を隔てた日本文明にも巨大な

影響を与えた。さらに、この青銅器や鉄器を中心とするスキタイ系文化の源泉が最終的には西南アジアにあるとすれば、古代の日本文明も遠くユーラシア大陸の西部に源泉をもつことになる。

四世紀末以後、日本の古墳から、鞍、鏡、櫛などの馬具、帯鉤、帯金具など乗馬用器具の出土が飛躍的に見られるが、これも遠く中央ユーラシアの騎馬文化に源泉がある。四世紀以後、馬及び騎馬技術が日本に到来したことは確実である。騎馬技術の到来は、日本文明に、交易圏の拡大や交通通信網の発達、戦闘形式の変化など、技術革新をもたらし、新文明の創造に寄与した。紀元前後から四世紀頃にかけて、ユーラシア東部の草原地帯で活躍していた匈奴や鮮卑などの騎馬遊牧民を通して、騎馬技術が朝鮮半島に伝わり、それが日本列島にもたらされたのである。古代の日本文明を一変させた馬文化は、中央ユーラシアの騎馬文化に源泉をもつ。

ユーラシア草原の騎馬遊牧民は、草原の道のネットワークを通して騎馬技術を各方面に伝え、人類の文明史を大きく塗り変えていった。中国の戦国時代から漢時代にかけての騎馬技術も、朝鮮や日本の騎馬の風習も、北方草原の騎馬遊牧民に起源をもっている。草原の騎馬遊牧民が発明した騎馬技術は、運送の大量・高速化、行動範囲の拡大、戦術の機動化、交易と戦争の増大、社会の組織化など、東西ユーラシアの文明変動に大きな役割を果たした。

古代日本文明の形成も、遠く中央ユーラシアの草原の道に発する騎馬民族文化の衝撃波の影響を深く受けている。日本文明の変動に、ユーラシア大陸を東西に結ぶ広大な草原の道に生まれた騎馬遊牧文化の果たした役割は大きい。二世紀後半から六世紀にかけての中央ユーラシアの騎馬遊牧民族の移動は、ユーラシア西部の古代ローマ帝国の崩壊やユーラシア東部の漢帝国の崩壊なども招いたが、このユーラシア文明の大変動は、朝鮮半島や日本列島にも及び、日本文明の新しい形成を可能にしたのである。

スキタイが強力な騎馬遊牧国家を形成しえたのは、鏡を発明し、騎馬技術を向上させたからである。スキタイは、黄金や青銅製の武器、装身具や馬具、金銀の装飾のある器などにその贅を凝らした。スキタイ風の短剣・アキナケス剣やスキタイ風動物文様を施した黄金製の美術工芸品などはよく知られている。スキタイは、これら古代ギリシアや古代オリエントから深く影響された文化を、草原の道の騎馬遊牧民の交易網を通して、ユーラシア

東部に伝えたのである。

確かに、中国北部や朝鮮半島は、ユーラシアの草原の道から押し寄せてくる騎馬遊牧文化の深い影響を受けてきた。特に紀元前九世紀以後からの、青銅器、鉄器と製鉄技術、馬具と騎馬技術、金銀の装飾技術など、西部ユーラシア起源の新しい文物や技術を、草原の道の騎馬遊牧民は、北部中国や朝鮮半島にもたらし、その文明を一変させた。弥生時代から古墳時代にかけての日本の古代文明も、大陸や半島からもたらされた草原の道由来の騎馬遊牧文化によって大きく変動し、新しい形成の道を歩んだのである。

オアシス路へ

朝鮮半島や中国大陸につながる海上ルートは、また、オアシス路（シルクロード）とも接続していた。このオアシス路を行き交っていた商業民は、中国大陸へ西アジア起源の新しい文物をもたらした。ササン朝ペルシア系のガラス工芸品、金銀細工、楽器、青色顔料、文様、想像上の動物や鳥などである。これらが古代の朝鮮文明や日本文明に与えた影響も大きなものであった。現に、古墳時代の日本列島でも、ガラス製の勾玉や管玉や小玉が大量に出土している。このガラス製玉類の加工技術も、オアシス路起源の技術といわれる。また、このガラス製品に使われるコバルトブルーの青色顔料も、おそらくオアシス路起源のものであろう。金銀細工は、直接は朝鮮半島由来のものであるが、その技術も、もとをたざせばオアシス路に至り着く。

六世紀後半から七世紀前半の飛鳥時代、さらに、その後の白鳳、天平時代も、いわばわが国の国際化時代であったが、その文化も、儒教や仏教や道教など中国に源泉をもつ文化ばかりでなく、遠く、東ローマやササン朝ペルシア系の文化の影響を受けた国際性豊かな文化であった。これら東ローマやササン朝ペルシア系の文物は、オアシス路を通じて中国に伝来し、それが、わが国に直接または朝鮮半島を通して流入してきた。ササン朝ペルシア系の銀製器やガラス器、楽器などが奈良の正倉院に蔵されていることは、そのことを如実に物語っている。

だが、オアシス路を経て日本に流入してきた文明の最大のもの、は、仏教であった。インドに発した仏教は、北西インドや中央アジアでペルシア文化やギリシア文化を取り込みながら、大乘仏教を生み出し、オアシス路や中国、朝鮮半島を通じて、日本にもたらされた。

仏教の伝来によって、日本文明は大きく飛躍した。

日本文明も、古来、ユーラシア大陸から押し寄せてくる諸文明の影響を深く受けてきた。なかでも、オアシス路に源流をもつ諸文明の影響は、今日の日本文明にも色濃く残っている。確かに、日本文明は、中国文明の強い磁場のもとに形成された周辺文明には違いない。しかし、その中国文明そのものが、オアシス路から流入してくる西方の諸文明の影響を強く受けてきたから、日本文明も西方からの文明伝播の波を大きく被ったのである。

四世紀から九世紀にかけて、ユーラシア大陸西部には、東ローマのビザンツ帝国、ササン朝ペルシアやアラブ・イスラム帝国、ユーラシア大陸東部には、魏晉南北朝から隋唐に至る帝国が出現し、これら東西文明がオアシス路を通して交流した。この時代の中国文明にオアシス路を通して流入してきた外来文化は、北西インド・中央アジア由来の大乗仏教文化、ササン朝ペルシアやアラブ・イスラムの西アジア文化、東ローマのビザンツ文化など、多様であった。これら外来の諸文化が中国的風土のもとで融合されて出来たものが、この時代の中国文明だったのである。この中国文明の影響を、飛鳥・白鳳・天平時代の日本文明は、直接または朝鮮半島を経由して受けた。六世紀から八世紀にかけての日本文明の形成に、オアシス路の果たした役割は大きい。

東シナ海へ

日本列島の縄文時代から弥生時代にかけて、その文化の基底部に、北方系ばかりでなく、南方系の文化が濃厚に流入し、日本列島が長江中下流域や華南の文化と共通性をもっていることは、すでによく知られている。日本列島の西日本地域と長江流域や中国南部は、同じ照葉樹林文化圏に属し、文化を共有している。しかも、この湿润中国の文化は船や水と深い関係にあり、そのような海人文化が、縄文以来、間断なく日本列島に流入していた。

陸稲や水稲の稲作文化もその一つである。長江と日本の深い関係を考えるには、東シナ海文明交流圏を前提しなければならない。水田稲作が波及してくるのは、朝鮮半島中南部や北部九州では、縄文晩期である。この朝鮮半島や日本列島に伝播してきた水田稲作のルートとしては、長江下流域から東シナ海を経て直接伝播してきたルートも考えねばならない。朝鮮半島や日本列島の水田稲作の起源は長江下流域にあり、長い時間をかけ、さまざまなルートを通じて、直接人々が渡来し、水田耕作技術を伝えたものと思われる。縄文晩

期に渡来した水稲稲作も、日本列島の文明構造を変化させ、弥生時代をもたらした。

この頃使われていたゴンドラ形をした準構造船は、中国の華南地方やベトナムなど、古代の呉越の水人社会で発達した船に起源をもつと言われる。この準構造船の登場により、弥生時代には、より多くの物資を積んで半島や大陸と交易することができるようになった。弥生時代も、半島や大陸と日本列島との間で、発達した海上交通を利用して、人、物、技術、知識、情報が、頻繁に飛び交っていたのである。日本列島は、弥生時代も、外来文明の流入による変革の時代であった。次々に押し寄せてくる新しい物や技術や知識によって、人々の生活様式は変化し、社会も変動した。

古墳時代にも、東シナ海を介した大陸との交流はますます盛んになっていった。玄界灘沿岸部の海上交易者たちも、おそらく東シナ海を直接横断し、長江下流域、さらに、華南の沿岸部まで交易に出掛けていったと思われる。この時代には、いわゆる倭の五王が南北朝時代の南朝・宋に朝貢して冊封を受けている。また、残された記録をみるなら、応神天皇の時代の百済からの縫衣工女の来帰、中国の呉地方からの縫衣工女の獲得、雄略天皇の時代の呉国からの漢織・呉織の獲得など、大和地方での絹織物の新しい技術の開始を伝えるものが多い。この呉国への通交記事にある程度の史実があるとすれば、その東シナ海交通を担当していたのは、宗像氏など北部九州の海人族だったであろう。

日本列島の人々は、東シナ海を通して、華中や華南との交流も頻繁に行なっていたのである。四世紀から五世紀にかけては、製鉄、土木、土器製作、織物、造船などに関する新しい技術が大陸から流入し、それらが古代日本の文明創造に大きく寄与した。その際、東シナ海を介した日本と大陸の交流の果たした役割は大きかったと言わねばならない。

六世紀に入ると、日本列島には、主に百済から仏教が伝来し、飛鳥に法興寺が建てられるなど、仏教文化の隆盛が見られる。だが、この百済仏教が中国南朝の仏教の影響を深く受けていたことを考えれば、日本の初期仏教と中国南朝の仏教の密接な関係は無視できない。百済に仏教が入ってきたのは三八四年といわれるが、これは中国南部の東晋からであった。インド僧、摩羅難陀が東晋から来朝し、百済に仏教を伝えたのである。日本列島にも、六世紀には、百済から多くの僧や博士が渡来し、仏教ばかりでなく、儒教、易、曆法、医学など新知識がもたらされた。朝鮮文明も日本文明も、東シナ海交流圏によって発展していったのである。

七世紀から九世紀にかけても、東シナ海を介した交流は盛んに行なわれた。なかでも、遣隋使や遣唐使の派遣は、日本文明の形成に大きな役割を果たした。遣隋使や遣唐使には留学生や学問僧が参加、隋や唐の新しい文化の摂取に努め、帰国後、これを普及した。彼らが隋や唐の国際色豊かな文化から学んだものは、政治制度、学問、思想、宗教、芸術、あらゆる面に及んだ。特に、奈良、平安時代の文化は、遣唐使がもたらした唐文化によって彩られた。遣隋使や遣唐使の留学生や学問僧、外交使節や商人などは、東シナ海を経由して、隋唐の新しい文物をもたらし、そのことによって、日本文明を新しく形成していったのである。この交流に果たした航海者の働きは重要である。

沖ノ島の出土品から

実際、沖ノ島祭祀遺跡からの膨大な出土品の中にも、これら草原の道、オアシス路、東シナ海経由と思われる遺物は数多くある。有名になった黄金製指輪は、韓国新羅由来のものといわれる。その作風は、慶州にある普門里夫婦塚出土の金製太環式耳環の主環、および韓国国立博物館所蔵の金製腕輪にある細金の円環や古新羅時代の金製指輪に酷似している。しかも、この新羅の細金の細工技術は、漢の楽浪時代の純金製帯金鈎のうちに見られる。漢の楽浪文化が、古新羅を通して、沖ノ島に渡来していたのである。

また、沖ノ島出土の珍しい金銅製竜頭も朝鮮半島南部経由といわれ、朝鮮半島南部との盛んな交易の有様を伝えている。現に、韓国慶州の新羅時代の金冠塚や金鈴塚からも同じものが出土している。その源泉は、北魏時代の龍頭にあるといわれる。

わが国の馬具の出土は中期古墳時代以後激増してくるが、沖ノ島でも、六世紀後半の岩陰祭祀の時代になると、金銅製馬具の出土が多くなる。金銅製の鞍金具、雲珠、杏葉、轡、帯先金具、辻金具などである。沖ノ島出土の金銅製馬具類の細工は見事なもので、透かし彫りの下に玉虫の羽や雲母板を嵌め込み紙で止めるといふ手の込んだ手法を使っている。こうした馬具は、韓国伽耶地域の五世紀代の古墳から出土しており、伽耶との深い関係が予想される。また、金銅製歩挿付雲珠も、伽耶や百済の副葬品として出土しており、沖ノ島との関係が深い。一般に、沖ノ島出土の金銅製馬具は、百済、伽耶、新羅系のものと思われる。だが、その起源が、草原の道の騎馬遊牧民にあることは確かである。

さらに、沖ノ島出土の浮出切子装飾瑠璃碗破片（二片）は、正倉院御物や伝安閑天皇陵

出土のカットグラス製碗と同類のものと考えられる。このようなカットグラス製碗は、中国寧夏回族自治区固原県李賢墓出土の切子碗と共通しており、さらに、イランのギラーン出土のササン朝ペルシア系カットグラス製碗と酷似している。紀元前後から六・七世紀にかけて、イラン高原では、種々のカット技法が編み出されていた。沖ノ島出土のカットグラス製碗破片も、朝鮮半島を通じて長安からペルシアに至るオアシス路（シルクロード）起源のものなのである。沖ノ島出土の金銅製馬具などに見える唐草文様や有翼人を絡ませた隠し文様も、明らかにオリエント起源であり、これも、オアシス路を通ってもたらされたものである。沖ノ島は、イランを発し、オアシス路（シルクロード）を通り、長安を経て、朝鮮半島から大和に至る道の結節点を形成していたことになる。

また、沖ノ島から大量に出土している鏡類の一部は、中国大陸由来のものであり、東シナ海海上ルートを通ってもたらされたものであろう。実際、沖ノ島出土の鏡のなかで舶載鏡と考えられるものは、一八号遺跡出土の方格規矩四神鏡、三角縁神獸鏡、二一号遺跡の獸帯鏡（二面）、八乳獸帯鏡（三二面）、八号遺跡の盤龍鏡（六面）など、かなりの数にのぼる。

さらに、沖ノ島から出土している唐三彩の断片も中国大陸由来のものと考えられ、東シナ海の海上の道が予想される。唐三彩は、盛唐の頃の洛陽や長安の郊外にある貴族の墳墓から出土しており、中国大陸以外からの出土例は珍しい。沖ノ島出土の唐三彩は七世紀後半のものと思われ、おそらく、大和政権によって沖ノ島に奉納されたものであろう。

また、沖ノ島出土の、勾玉、管玉、碧玉製管玉、ガラス製切子玉、ガラス製小玉、水晶製三輪玉、真珠玉、水晶製勾玉、瑪瑙玉、滑石製や碧玉製の剣、金銀銅製の剣などは、むしろ、日本列島から朝鮮半島へもたらされた輸出品の一部が奉納されたものであろう。翡翠をはじめ水晶で作った勾玉や切子玉は、日本海沿岸を中心に弥生時代から古墳時代にかけて製作されているが、それらは、また、朝鮮半島の新羅、伽耶、高句麗からも出土している。したがって、これら朝鮮半島出土の玉類は、交易を通して日本列島からもたらされたものであろう。日本列島からもたらされた玉類が、朝鮮半島産の鉄や金と交易されていたのであろう。

草原の道やオアシス路や東シナ海経由の文物が、朝鮮半島南部を通じて、あるいは直接北部九州にもたらされ、列島各地に運ばれるとともに、日本列島からも、また、この海上

の文明の十字路を通って、さまざまのものがもたらされたのである。

沖ノ島のなかの世界文明

文明は、他の文明との接触によって、自己自身を形成していく。文明間の交流や接触を通して、一つの文明から他の文明へ、新しい文物や情報が伝播して、それが文明を大きく塗り替えていく。日本文明も、絶えず外から新しい文物や思想を受け入れることによって、自己発展してきたのである。しかも、日本列島の文明は、交通路としての海を通して、草原の道とも、シルクロードとも、中国大陸とも結びつき、ユーラシアの諸文明と深く結合されていた。

特に、北部九州は、対馬海峡を介して対岸の朝鮮半島や大陸と直結していたから、そこを通してユーラシア大陸の諸文明が盛んに流入してきた。そのことによって、古代の日本文明は絶えず変革され、脱皮を繰り返していた。この大陸や半島との交流があつて、はじめて日本文明の形成はありえた。古代でも、対馬海峡を通して、半島や大陸から多くの渡来人が来航し、外交使節も訪れ、常に大陸や半島の新しい技術や情報もたらされていたのである。

日本文明の形成過程を考える上で、海を介して流入してきた新しい物や技術、宗教や制度、情報や知識が大きく寄与してきたということは否定できない。この場合、それらの移入に携わった海洋民の果たした働きは偉大である。海を障害とは考えなかつた航海民たちは、その交易活動などによって、文明と文明を結びつける媒介の役割を果たした。彼らの媒介によって、物や情報が移動し、その交流から、新しい社会秩序も形成されていったのである。彼らは、文明の境界を越えて移動し、文明の相互浸透を可能にできた。特に、日本列島は四方海に囲まれていたから、航海民なくして、新しい文物の受容はできなかつた。宗像氏など航海民が、古代日本文明形成に果たした文明的役割もこの辺にある。彼らは、大陸や半島に赴き、交易に携わりながら新しい文物を運び、日本文明を常に変動させる働きをしてきたのである。

これら海人集団の働きによって、日本文明には、朝鮮半島、中国、インド、ペルシア、オリエント、地中海など、世界各地の文化が流入してきた。日本文明の中に、世界文明が宿っている。日本文明も、ユーラシアの諸文明の影響を深く受け、その遺産を保存しながら

ら、独自の文明を形成してきたのである。日本文明にも、草原の道の騎馬遊牧民や、オアシス路の商業民、南シナ海や東シナ海を航海していた海洋民が運んだ世界各地の文化が流入してきている。だからこそ、日本古代の文明形成は、ユーラシア大陸の諸文明の変動と深く連動しているのである。

沖ノ島も、ユーラシアの巨大な文明ネットワークの一つの結節点であり、そこには、世界中の文明要素が集約され、結晶化している。沖ノ島は、四世紀から九世紀に至る世界中の文明の一つの集約点であり、焦点である。沖ノ島の中に、世界文明が宿っているのである。「一滴の露の中にも全宇宙が宿る」という世界観は、西アジアまたは南アジアを起源として、東西に広がり、わが国にも受け入れられ、茶道や華道の源泉にさえなっているが、同じことは文明についても言える。沖ノ島という地球全体から見れば一滴の露にも等しい小島のなかに、世界中の文明が宿っているのである。

註

- 1 「仲哀紀」二年
- 2 「神代紀」上 第六段
- 3 『魏志東夷伝』弁辰の条
- 4 「応神紀」十四年、三十七年 「雄略紀」十四年

参考文献

- 倉野憲司・武田祐吉校注 『古事記・祝詞』 日本古典文学大系 岩波書店 一九八三年
- 武田祐吉訳注 『新訂・古事記』(角川文庫) 角川書店 一九八三年
- 坂本太郎ほか校注 『日本書紀』上下 日本古典文学大系 岩波書店 一九八六年 一九八五年
- 井上光貞監訳 『日本書紀』上下 中央公論社 一九八七年
- 班固 『漢書』3 (漢書地理志) (ちくま学芸文庫) 筑摩書房 一九九八年
- 井上秀雄ほか訳注 『東アジア民族史』1・2 (魏志東夷伝など) (東洋文庫) 平凡社 一九七四年
- 武藤正行 『海の正倉院 沖ノ島』 世界日報社 一九九三年

弓場紀知 『古代祭祀とシルクロードの終着地 沖ノ島』 新泉社 二〇〇五年

小林道憲 『古代日本海文明交流圏』 世界思想社 二〇〇六年

小林道憲 『文明の交流史観』 ミネルヴァ書房 二〇〇六年

『比較文明研究』第十二号 麗澤大学比較文明研究センター 二〇〇七年 所収

古代の日本海からみた白山と立山

白山と立山

白山も、立山も、修験道のふるさとであります。修験道は、古代の山岳信仰の上に、仏教や道教が習合して成り立っています。だから、この修験道の一番古い層のところに、山の神に対する信仰があることは疑いありません。

山は、白山でも、立山でも、火山の場合、爆発することがあり、また、雪解け水がひどいときには、洪水になったりもします。つまり、山は、時として猛威をふるいます。しかし、山は、同時に、狩猟民には、動物の肉を恵んでくれ、農耕民には、水を恵んでくれます。平野では、この水によつて、米がよくとれます。かくて、われわれは、山に対して、畏れと敬いの両方の信仰を持つてきました。

ここから、山は、低い山でも、高い山でも、神々が住んでいると考えられるようになります。したがって、また、山は、死者が帰りゆくところという考えも出てきます。山は、あの世、または、あの世とこの世の境と考えられていたのでしょうか。しかも、同時に、山は、そこから死者の霊が戻ってくる場所でもあります。つまり、山は、(死と再生)の場所と考えられていたと思われます。それは、おそらく、縄文時代から続いていた考えでしょう。そして、そこへ水稲稲作が入ってくると、山は、水を恵んでくれる場所としての意味が大きくなってきます。また、山は、鉱物を恵んでくれる鉱山としても、重要視されてきます。さらに、山は、農耕儀礼や鉱業儀礼ばかりでなく、成人儀礼やお産のためのお籠もりの室を建てる場所にもなっています。

ただ、山の信仰の最古層には、狩猟民の信仰があったと思われます。山からは熊が出てきたりします。熊を捕って、その肉を食べれば、それは山の神からの恵みです。その熊は、山の神の霊でもあります。この信仰は、おそらく、旧石器時代まで遡ると思われます。

シラ信仰の起源

白山は、立山と同じ神の山であり、越前、加賀、美濃にまたがる霊山です。白山神は十面観音の垂迹といわれます。白山神は、一番古い層では、白山比咩しろやまひめ(あるいは菊理姫)という女神でした。それが仏教と習合して、十一面観音になったのです。白山には三山あ

りますが、あとの二山は阿弥陀如来と聖観音に見立てられています。白山も、立山と同様、修験道が盛んであります。立山と同じように、白山も曼陀羅に見立てられています。越前の泰澄大師の開山になるといわれていますが、少なくとも、伝説では、七十七年、八世紀の初めということになっています。

白山信仰の分布を調べますと、全国に二七〇〇社あるとも、三〇〇〇社あるともいわれています。しかも、白山神社は、西日本にも少しはありますが、大体、東日本に偏っています。北陸、東北、関東、中部など、東日本に多い。もちろん、越前、加賀、美濃には、それぞれ四〇〇社とも五〇〇社ともいわれ、おびただしい数にのぼります。しかし、これらのなかには、金沢の南、白山市（鶴来）の白山比咩神社とは関係ないものも沢山あります。だから、加賀の白山信仰がそのまま分布していると考えない方がよい。

われわれが春や秋のお祭りの前に物忌みをしてお籠もりをする山があります。それを、低い山でも、高い山でも、〈シラヤマ〉と呼びました。このような〈シラヤマ〉信仰が白山信仰の最古層にはあるようです。

もうひとつは、〈オシラさま信仰〉との関連です。東北地方の岩手県や青森県に残っている〈オシラさま信仰〉は、養蚕と深い関係があると思われませんが、この〈オシラさま信仰〉と白山神社の一部とは関わりがあるようです。この関連もあつて、白山神社は、東北にもかなりあります。この〈オシラさま信仰〉は、かつては、関東、中部、北陸など、いろいろなところがありましたから、これが、あとから白山信仰と合体、習合していったことも考えられます。

それから、もう一つ、これは中世になってからのことですが、白山修験道の修験者が、白山の方から、直接、現地の神社に分霊をしました。そういうしかたで、白山神社が広まった可能性もあります。

さらに、立山とは違って、白山は航海民の信仰を集めています。（山あて）といって、白山は、航海のよい目印になりました。立山連峰の場合は、雄山ではなく、むしろ、薬師岳が富山湾からはよい目印になりましたから、薬師岳の方が、航海民の信仰を集めています。白山も、昔から航海民の信仰を集めており、この航海民が、いろいろなところへ行つて、居留地を作っていきます。その居留地に、白山神社が建立されます。そういうしかたで、白山神社が広まっていった面もあります。このように、全国の白山神社には、いくつもの層があります。

これらのうち、最古層にあるお籠もりをする山としての〈シラヤマ〉信仰ですが、これ

は、全国にある（白山）^{しらやま}という地名にも反映されています。（シラ）がつく山も、日本全国にあります。白根、白神、白岳、などです。これは、村祭りをするときにお籠もりをする山をいいますが、そこから、一度死んでまた生まれ変わってくるという信仰、（死と再生）の信仰が出てきます。そして、それらは、やがて、稲霊の（死と再生）の信仰にも結びついていきます。稲霊も、冬には山に籠もって、そこから、春になると再生してくると信じられていました。そのようにして、その年の米の豊饒を、山の神が約束してくれたのです。だから、山の神は、また、農業神にもなります。

さらに、（シラヤマ）は、人間が生まれるとき、つまり、女性の出産のときにお籠もりする山にもなります。ここにも、やはり一度お籠もりをして、そこからまた新しい生命が生まれてくるという信仰があります。

また、これは、養蚕とも関わってきます。蚕も、繭のなかにお籠もりします。そして、一度死んだようになるけれども、そこから、自分で繭を破って、蝶に変身して出てきます。しかも、それが絹織物を恵んでくれます。ここからも、（死と再生）の思想がでてきますが、この養蚕とシラヤマ信仰が結びつくのも当然のことです。

実際、よく知られていることですが、奥三河に《花祭り》という祭りがあります。この《花祭り》でも、《子種まき》というオシラ祭文と同じような祭文を唱えながら行なう養蚕に関わる儀礼が入っています。奥三河の花祭りは、白い布で覆った橋をつくって、円錐形や方形の建物を白い布で覆い、上の方に天蓋をかけます。そして、厄年の氏子たちがそのなかでお籠もりをします。次に、外で踊っていた鬼がやってきて、天蓋を壊すと、そこから氏子たちが一斉に飛び出します。そのとき、氏子たちは、扇子を両手に持ち、口にも扇子をくわえて出てきます。そして、船を漕ぐまねをします。それから俵を運びます。これは、神楽に起源を持つ祭りだろうと考えられていますが、神楽ばかりでなく、白山の修験道の行者が、儀礼をつくる際には相当介在していたのではないかと推測されています。

この奥三河の花祭りの解釈は、儀礼の内容に関しては、仏教的な観点からのものが多く、お籠もりをするのは、地獄へ入ることであり、そこから出てくることは、浄土へ参るということだと考えられています。しかし、ここにも、やはり（死と再生）の思想、そして《生命の永遠》を願う古い信仰が横たわっていると思われれます。しかも、それが、養蚕とも習合していきます。花祭りの最後に氏子が出てきて行なう所作も、繭から蚕が蝶になって出てくるのを模倣しているのではないのでしょうか。この奥三河の花祭りでも、この祭りが行われる前には、村人は、近くの白山に登ります。

ところで、岐阜県の飛び地になっている石徹白村は、白山の中宮にあたります。かつては福井県に属し、交通の便などで、今は岐阜県の飛び地になりました。この石徹白村は、立山の芦峯寺や岩峯寺とおなじような宗教村落でした。ここでも、やはり四月に、五穀と同時に、桑の木と蚕の豊饒を祈る（桑蚕祭）が営まれていました。さらに、美濃の長滝白山社でも、（蚕飼祭）が行なわれていました。こうして、養蚕の信仰がシラヤマ信仰と結びつき、それらが、最終的には、白山信仰に統一されていくことになります。ただ、その最古層のところにシラヤマ信仰があることは確かです。

もうひとつが、オシラさま信仰との関わりですが、オシラさま信仰は、東北地方に残っていました。イタコ、モリ、ワカなどと、いろいろな呼び方をされる盲目の巫女がいました。ただ、かつては、北陸、中部、関東にも、オシラさま信仰は広がっていました。実際に、美濃の白山信仰圏にも、オシラ祭文の伝承がありました。また、かつては、白比丘尼が、オシラ祭文を唱え、男女の木偶をかざして、遊行して歩いたこともあったようです。ただ、東北では、これは、必ずしも養蚕とだけ結びついていただけではありません。オシラさまは、農業神にもなっているし、手工業神にもなっているし、航海神にもなっています。家内安全や五穀豊穡、商売繁盛や豊漁など、何でも祈りました。また、よく知られていますように、死者の霊を呼び寄せる口寄せもやりました。男女の木偶に着せ替えをする（オセ نداク）という儀礼も行なわれていました。巫女が家々に行って（オシラさま遊ばせ）という男女二神の踊りを見せて、梓弓を引くという儀礼も行なわれていました。それをすると、家の繁栄が約束されるという信仰です。これは、かつては、かなり広く、少なくとも東日本一帯には広まっていたようです。

ただ、このオシラ祭文のなかのひとつに、馬娘婚譚、馬と娘が恋仲になるという話があります。長者の娘が馬と恋仲になり、一向に嫁に行こうとしない。それで、長者が馬を殺してしまった。すると、馬とともに、娘も昇天してしまつて、その後、天から白と黒の蚕種が降つて来た。それが養蚕の始まりだという、養蚕の起源を説く有名な話です。

これは、張儼撰の『太古蚕馬記』のなかにそっくりな話があつて、起源は、中国に遡っていくことになります。この伝承は、少なくとも、中国南部一帯には広まっていたようです。それがそのまま、日本列島の方へきたのでしょう。あるいは、日本の知識人が『太古蚕馬記』のなかに馬娘婚譚というものがあることを、オシラさまの巫女たちに智恵付けをしたのかもしれませんが、いずれにしても、この起源は長江中下流域辺りにまで行きます。

オシラさま信仰そのものは、必ずしも、養蚕のみに関係するわけではありません。しか

し、おそらく、はじめは、養蚕の広がりとともに流布していったと思われます。オシラさま信仰は、東日本に多く分布し、やがてシラヤマ神と同一視されて、その一部は白山信仰とも結びついていきます。実際、オシラさまの木偶には、他の木も使われますが、桑の木も多く使われていました。しかも、オシラさま信仰に似た男女の木偶を使う信仰と儀礼は、朝鮮半島にも、沿海州にも、中国東北部にも分布しています。とすると、これは、環日本海的な信仰のように見えますが、しかし、その起源は南へ下っていきます。

《シラヤマ》、《オシラさま》というとき、共通して出てくるのが《シラ》という言葉です。この《シラ》という言葉は、ひとつは、蚕が吐き出す糸、つまり絹糸を意味します。そして、絹糸に当たる言葉は、日本では、《シラ》《シラガ》《シル》《シサガ》《シタガ》《シラゲ》と、いろいろとあります。朝鮮半島では、絹糸のことを《シル》といいますが、満州語では《シルゲ》、蒙古語では《シルケック》になります。また、満州語では、《シル》という言葉は、「次から次へと現われ出る」という意味だといわれます。この《シル》が変化して、絹糸からつくられる琴の弦にも、《シル》という言葉が使われています。これが、草原の道やオアシス路を通じてヨーロッパにいくと、《シルク》になります。しかし、その起源は、おそらく、長江中下流域に求めねばならないでしょう。オシラさま信仰と同じ木偶を使う儀礼、傀儡呪法は、雲南省の苗族にも残っているといわれています。長江流域にやってきた漢民族にも、この儀礼は残っていたといわれています。

布目順郎氏の一生をかけた研究でも、絹は、やはり、長江中下流域に起源が求められています。蚕そのものは、もともと前からどこにでもいたのですが、問題は、それを飼育して繭を取り、そこから絹糸を取る技術です。これが、長江中下流域に起きて、そこから東アジア一帯に広がったと思われます。日本列島へは、まず、弥生前期の末、北九州に長江起源のものが渡来したといわれます。

絹は、長江起源のものが最初に来て、それから、弥生中期中葉頃に、より高度な技術が、朝鮮半島の楽浪からもう一度渡来したようだとされています。そして、日本海沿岸部へは、布目氏の著書では古墳時代とありますが、最近の考古学的知見によれば、弥生後期には来ています。実際、鳥取県の青谷上寺地遺跡から、かなり高度な絹織物の遺物が出ています。そして、やがて、大和まで波及していった、奈良、平安を通じて、全国に広がっていったようです。それとともに、《シラ》系の言葉も普及していったと思われれます。

この《シラ》という言葉の意味ですが、やはり、これも《死と再生》を意味していたのではないかと。再び生まれ変わる、生まれ浄まるという《再生》の意味が、《シラ》という言葉

葉にはあつたのではないか。それは、また、〈白〉という色をさす言葉とも通じてきます。
〈白〉は〈生まれ変わり〉〈再生〉を意味します。蚕も白い虫であり、変態を繰り返して、脱皮をする。そして、繭に籠もり、蝶に変身して出てくる。生まれ変わる。だから、蚕は、〈死と再生〉という思想（生命の永遠）という思想に結びつくのです。それは、やがて成人儀礼やお産の儀礼、稲霊の再生の信仰とも結びついていきます。

柳田国男は、「稲の産屋」のなかで、〈シラ〉は稲霊の再生を意味していたと言っています。ただ、柳田説には、少し無理なところもあります。八重山群島にしか残っていないから、〈シラ〉という言葉をもってきて、それが〈稲を高く積んだところ〉を意味するところから、〈シラ〉という言葉と稲霊を結びつけました。そして、日本人の南方起源説の一根拠としました。〈海上の道〉の考え方です。しかし、本来は、〈シラ〉は、蚕との結びつきの方が強いようです。ただ、考古学的に言えば、稲も蚕も、結局は長江起源に行き着きます。思想的に見ても、稲も蚕も、両方が〈死と再生〉の思想と結びついていますから、根は同じということになります。

クマ信仰の起源

他方、立山の場合は、その開山縁起に出てくる熊に注目したいと思います。そして、この熊信仰の起源を探ってみたいと思います。立山の開山縁起の一番古い形は、狩人が立山に入って熊を射たところ、それが実は阿弥陀如来であった、そして、その狩人が立山を開いたという説話です。熊野地方にも、同じような話が残っています。熊野信仰でも、やはり、獵師が熊を射たところ、その血が流れて、その血をずつとたどっていくと、阿弥陀如来がおられた。それを見て、獵師は、矢を折って出家をした。これが、熊野が開かれたいわれであるということになっています。

そこで、文献上すぐに思い出されるのは、神武東征譚に出てくる熊です。これも、熊野信仰と結びついています。神武軍が大迂回して、熊野から大和へ入る途中で、熊野の大きな熊に出遭う。そのとき、神武と神武軍は気を失う。そこへ高倉下たかくらじが剣を持ってくる。その剣の靈力で、皆の目が覚め、再び大和への遠征にでかけていくことができた。その剣をふつ〈布都の御霊〉みたまというと、『古事記』には書いてあります。

ここにも、〈死と再生〉のモチーフがありますが、いずれにしても、これらの縁起や神話には、狩猟民の信仰があるように思われます。日本列島にも、狩猟民の信仰が最古層にあります。その一つが熊信仰です。立山信仰や熊野信仰の起源も、狩猟民の信仰まで帰って

みた方がよい。

そうすると、これは単に日本列島だけではすまないことになります。朝鮮半島の檀君神話などとも関係してきます。檀君神話は、古朝鮮の建国神話です。桓雄という英雄が、日本でいうと三種の神器のようなものを天帝からもらい、輩三千人を率いて、太伯山に天降ってきた。すると、そこには、人間になりたい虎と熊がいて、熊はうまくお籠もりができたが、虎は我慢ができなかった。それで、虎は虎のままだったが、熊は美しい女性に変身して、熊女となった。熊女は桓雄と結婚して、その結果、檀君王陵が生まれた。この檀君王陵が古朝鮮を建国したという話です。

この檀君神話も、その起源は、よくいわれますように、朝鮮半島だけにはとどまらず、少なくとも、北方ユーラシアのツングース族の信仰にまで帰らねばならないでしょう。中国東北部、沿海州、シベリアの狩猟民の信仰です。

たとえば、中国東北部、大興安嶺の麓に住むオロチョン族は、ツングース系で、狩猟生活を送っている民族です。そのオロチョン族の神話にも、狩人が山の中に入って行って、雌熊に助けられたという話があります。狩人と熊は結婚して、長い間一緒に暮らします。その結果、上半身が人で下半身が熊という子どもが何人も生まれました。その後、別れ別れになりますが、狩人に連れて行かれた半数の子どもが、オロチョン族の祖先になったという話です。これは、この部族の始祖神話です。

実際、オロチョン族も、熊を祭る儀礼を行なっています。その際には、熊を殺して、肉は食べるのですが、頭蓋骨は風葬にします。また、祭りの時でなくても、熊が獲れて、その肉を食べるときも、フルオイレンという唄を歌って祝います。オロチョン族にとつては、熊の霊は人の霊であつて、人の霊と熊の霊はひとつです。熊と人はひとつであり、熊が人になり、人が熊になるのですから、熊と人が結婚することもあると信じられていたのです。

中国東北部から東シベリア一帯、アムール川、サハリン、カムチャツカ、そして、北海道、さらに、かつては日本の東北地方、北陸方面や、もつと南にまで、このような熊に対する信仰があつたようです。たとえば、サハリンでも、アムール川流域でも、アイヌの熊祭りと同じ熊祭りを行なっています。小熊を飼育して、一月の満月の日に森の神に送るといふ儀礼です。そのとき、熊に贈り物を持たせる。そうすると、森の神は、その年の森の恵み、豊饒を約束してくれる。そういう信仰がありました。アイヌの熊信仰は、環日本的な信仰だったといえます。

しかし、この信仰は、単に環日本海だけにも取まらない。北アメリカのネイティブ・アメリカンにも、同じような熊に関する信仰があり、神話も残っています。また、この信仰は、西シベリア、西ヨーロッパにまで及んでおり、分布領域はかなり広くなります。

これらの伝説、神話、民話などに出てくる熊の役割を分類すると、ひとつには、熊は、文化英雄の役割を果たしています。つまり、人間に火や弓矢を与えてくれた文化英雄としての熊信仰です。ギリシアのプロメテウス型の神話ということになります。また、熊と人が結婚して部族の始祖になったという始祖神話にもなっています。したがって、また、熊は部族のトーテムでもあり、守護神でもあります。さらに、また、熊は森の人間だという信仰にもなります。森の人間は熊である。この森の人間である熊と、森の外の人間は、それぞれ贈り物を交換して助け合います。いろいろな形の信仰がこの熊信仰には宿っています。が、どれも、結局、熊は、神または神の使者として扱われています。これは、北方ユーラシアや北アメリカも含めて、北半球の針葉樹林地帯では、太古から流布していた信仰だったようです。

この熊信仰の起源をたどっていくなら、おそらく、旧石器時代にまで遡ることになると思います。シベリアの森林の道は、人類が一番はじめに移動してきた道のひとつだといわれてきました。だから、熊信仰の起源も旧石器にまで帰らねばならない。実際、今から一万年数千年前の旧石器時代の洞窟から、粘土で作られた小熊の頭蓋骨が出てきています。この頭蓋骨には傷がありますから、何らかの儀礼が行なわれていたと思われれます。もっと古いところでは、大腿骨をはめ込んだ熊の頭蓋骨も出てきています。やはり、儀礼を行なっていたようです。また、フランスのラスコーの洞窟には、血を流している熊の絵が描かれています。ここでも、豊饒を祈る儀礼を行なっていたようです。その旧石器時代の記憶が、新石器時代まで引き継がれて、今日にまで至っているのでしょうか。そして、その信仰の意味も《死と再生》にあつたようです。

少なくとも、北方ユーラシアの人間にとっては、熊は森の霊力であり、神でありました。熊が出てきたときは、たとえ、その熊を捕らえるにしても、その肉を食うにしても、それは森の神の恵みです。熊を食うということは、そういう意味では、神とひとつになるということでした。また、熊がそのようにして死ぬということは、森の生命力の《死と再生》を表わします。熊は、死することによって、再び森へ帰って行って、また、次の熊なり他の動物なりになって、生まれ変わってきます。そのような生まれ変わりの思想が、熊の《死と再生》に象徴されています。《死と再生》《生命の永遠》という思想は、旧石器時代から

あつたと思われます。

それで思い出すのが、立山の《矢疵の阿弥陀像》です。胸に矢の疵を負った阿弥陀さまが、越中のお寺に何体も残っています。この矢疵を負った阿弥陀さまは、立山仏として有名です。そして、これは、開山縁起にもありますように、もとは疵を負った熊でした。熊信仰が背景にあります。その記憶は、今、お話ししましたように、旧石器時代にまで帰ると思われます。それは、少なくとも、北部ユーラシア的な記憶だと思われます。

古代日本文明形成の二つのルート

そう考えていきますと、結局、古代の日本文明を形成していた二つのルートが出てきます。われわれは、白山信仰と立山の開山縁起の起源をたどるところから出発しました。そして、シラとクマの起源をたどってみました。

ひとつは、白山信仰から養蚕信仰へとつながり、ここからは、日本文明形成にとって重要なルートのひとつ、南方ルートが出てきます。東シナ海から日本海側や太平洋側へのルートが出てきます。時代的には、新石器時代にまで遡ります。

もうひとつは、立山の熊のあとをたどっていくと、北方ルートへいきます。これは、日本文明形成の最古層ということになります。考古学的にいうと、細石刃文化がシベリア地方から北海道、東北をはじめ、日本海側にも、旧石器から新石器にかけて入ってきます。熊信仰は、この文化と一致するもので、森林の道という日本文明を形成した最古層に至り着きます。時間的には旧石器時代にまで遡ります。

時間的・空間的には、以上二つのルートに分かれるわけですが、哲学的・思想的には、結局、同じ根に遡っていきます。シラもクマも、《死と再生》《生命の永遠》を願う思想に立脚しています。そして、生と死は連続しており、魂は不死であるという思想に帰着します。

白山も立山も、修験道が盛んだったところです。この修験道も、《死と再生》の思想に裏打ちされています。山に籠もり、そこから再生してくる。この信仰が一番基層にあつて、修験道は成り立ちます。それが仏教的に解釈されると、地獄を経て浄土に生まれ変わるといふ考えになるのです。

白山と立山の最古層にある信仰を考察してみました。

参考文献

- 高瀬重雄『古代山岳信仰の私的考察』 名著出版 一九八九年
下出積與『白山信仰』 雄山閣 一九九〇年
高瀬重雄『白山・立山と北陸修験道』 名著出版 一九七九年
王宏剛・関小雲『オロチヨン族のシャーマン』 第一書房 一九九九年
萩原眞子『東北アジアの神話・伝説』 東方書店 一九九五年
斎藤君子『シベリア民話への旅』 平凡社 一九九三年
布目順郎『絹の東伝』 小学館 一九八八年
宮田登『白のフオークロア』 平凡社 一九九四年
柳田國男『海上の道』〔定本・柳田國男集〕第一卷 筑摩書房 一九六三年

『山岳信仰と日本人』NTT出版 二〇〇六年 所収